

随想

街を明るく美しく

寺田 馨

人の心はその周囲の環境に左右されるところが大きい。街が美しく、その雰囲気が出るれば、そこに住む人の心も自ら和やかになってくるし、街が汚れて乱雑であれば、人の心も粗雑になってくるのではなからうか。

熊本市は、昔から「森の都」と言われ、地方文化の中心に称されてきた都市である。街の中心にある熊本城の威容はこの街にふさわしいし、県庁から眺める周辺の緑の多い風景は人の心を爽かにしてくれる。この限りにおいては、熊本市は、県都としての風格を持つているが、街路を歩く時に目に映る周囲の様子は、必ずしもこの古い都市にふさわしいとは

思われないのである。大きな立看板が付近の建物や環境には目もくれずわが物顔に立っているし、店の前の歩道には空箱や不要品が放置してあって街の美観を害するだけでなく、歩道を通る人の邪魔にもなっている。

昔は、自分の家の内だけでなく、家の前の道路や付近の空地を清掃することはあたりまえであるという気持があったように思う。朝早く起きて家の前の道路を掃き、打ち水をしている老人や主婦の姿をよく見かけたものである。もちろん現在でもこのような良い習慣を持ち続けておられる市民も多数おられることと思うが、他面には、街の清掃美化は地方公共団体である市の責任だと思っている市民もおられるのではなからうか。

街を明るく、美しくして気持よく市民生活を送るためには、何よりも市民の一人一人がまず手近な自分の家の周辺を清掃し、通行に邪魔な物件を置き去りにしないことから始まるのではないかと思う。

また、広告物を設置したり、貼布したりする場合に、法令に定められた条件をよく守るだけでなく、周囲の環境を考慮し、それにふさわしい場所と方法を選ぶ気持が肝要ではないかと思うのである。道路交通法によって禁止されているか

ら、あるいは屋外広告物法に定められているからというだけでなく、もっと積極的に、市民の一人として街を明るく美しくすることが義務であるという気持を懐くことが大切ではないだろうか。

熊本市では、去る九月、関係機関に呼びかけて、街を美しくする運動を実施され、私たち警察関係者はその趣旨に心からの賛意を表して、出来るだけのお手伝いをするにしようとしたが、幸いにして非常な成果を収め、市民の間にも街を明るく美しくしようという気運が盛り上ってきたようである。さらに市当局では、この盛り上りつつある気運を醸成し、市民運動に高める契機とするために、今後毎月一回この運動を展開することとなったが、まことに時宜に適した措置であると心から敬意を表したいと思う。

このような運動が本場に市民の一人一人の日常生活の中にとけ込み、意識しないで、街を明るく美しくしよう心がけるようになり、さらにこの運動が熊本市から周辺の市町村に広がり、やがて県内どこへ行っても住民の気持にこの街を明るく美しくしようという意欲が満ち溢れるときがひと時でも早く来るように願って止まない次第である。

(熊本県警察本部長)

窯めぐり

新開 宗幸

特別やきものにくわしいということはない。またそれを研究しているわけでもない。ただ好きなだけである。

数日前、日田の小鹿田(おんだ)皿山を訪ねる機会を得た。民陶祭の前日とかで、十軒ばかりの窯元は、どこもその準備が整い、仕事場も、座敷も、庭先も、所せまく並べられていて、一わたり見て歩くだけでも二時間はかかったらうか。もともと日常生活用品を焼き続けているこの窯は、気取りもなく素朴な親しみを感ずる。とびカンナ、刷目(はけめ)、うちかけ、の小石原焼にみる同じ技法は土の肌、釉の色と共に、見馴れたものだけに知人の家に来た気安さである。青く晴れ上った秋空にこだましてギギッ、ザァァッ、トーン、とくり返す唐臼の土砕きは、気の遠くなるのかさ……。美しい山菜煮付を出してくれたそば茶屋は、谷川をまたいで店を出している。この窯場も、大方人家のまばらな山峡の谷川のほとりに窯をついてあるが、先月たずねた萩、湯本もここ小鹿田もそうである。土と水と炎の一体となった芸術といわれるゆえんがうなづける。

谷川にそってブラブラ歩くと、珍しい

草花にお目にかかるのが何とも嬉しい。うす紅色の釣舟草を根ごと包んでいる側で、白の水引草を見つけた時は嬉しかった。赤い水引の中に混って、数本の白の可憐さ、突然変異で又赤に戻るかも知れないけれど、いま我が家で根づくのを楽しみにしている。唐臼へ落す水を谷川から引いた樋にザルをのせ、里芋を洗っていたおばあさんが私の掌の釣舟草をみて「指さし草ですな」と教えてくれた。

「窯元さん達あー 景気がいいですがのー わたしらは、つまりません。」

おばあさんの述懐は胸にひびくものがあった。プームを呼んで、焼きさえずれば売れるという「我が世の春」かも知れないが、長い歴史の流れの中で、つらい、苦しい、きびしい時代もあったことだろう。陶土を掘り、乾したり、砕いたり、こしたりこねたり、そしてロクロを回し、釉薬をかけ、窯をたき……。その工程と確率をおもえば茶碗一つの価値もわかる気がする。然しである、好調の波にのった今だからこそ良心的にしてほしい。われわれ庶民の手にも、気に入った品が、手頃な値段で購なえる。そんな状態をのぞむのは無理であろうか。

ともあれ、私があちこちの窯元めぐりを始めたのは数年前のことである。小岱高田、水平、広山、肥後ふもと、等々の

地元の窯から竜門寺、長太郎、佐賀、福岡、四国、それに先月たずねた萩、湯本とこれから行きたい所はまだ数多い。この楽しみも、私がお茶をやってきた。これからも一生かけて勉強してゆこうと思うその一分野にすぎない。もとめてきた壺を、棚に上げたりおろしたり、なでてみたり煩ずりしたり、今宵も一人悦(えつ)に入っている私である。

(茶道教授)

暑やうも(い)す

樋口 恒夫

今年の三月上旬、大阪から転動して来たとき、やや驚いたことがあった。

まだ、かなり冷え込みのきびしい季節なのに、行く先々で「熊本の夏の暑さは大変ですばい」とおどされたからだ。小生もこれまで福岡、京都、奈良、大阪と指折りの暑い土地に住んで来たといっても、「いや、それどころではなからうか」

そこで、熊本の夏をすごした実感をいえば「確かにお説の通り」である。日中の気温の高さだけなら盆地性の気候の京都、奈良と同じくらいだ。だが、熊本の方がはるかに湿度が高い。むしろ暑さというタイプは大阪、福岡に似ている

が、熊本には海からの風がない。先日、九州の全県庁所在地に住む同僚との会合でも「熊本は九州一むし暑い」と評定をくだされた。

いものらしい。小生は独立自尊の精神がラスやや気むすかしと解しているがどうだろう。

そのむし暑い熊本で男性は長ずぼんにくつという北方民族の服装で仕事をしなければならぬのはつらい。ノースリーブ、ミニスカート、サンダルばきの現代女性風俗のほうが、むし暑い夏の服装として、はるかに合理的である。昔は男の方が「よくぞ男に生れける……」といった夏をすごしたらしいが、現代では「よくぞ女に生れける……」といった夏のすごし方になってしまったようだ。

それで米国のハートフォード市やサンアントニオ市、日本万国博会場に出来ているような地域冷房施設は気候の面からいえば、熊本にこそ必要だと考えている次第である。

ところでもっこす気質。通俗的なマスコミのはんらんのせいか、現在日本では独自の意見をもった人が少なくなっている。しかし、熊本はもっこす気質から、かなり独自の意見をもった人が多いようだ。

流行におぼれたり、おもねたりする風潮が強いなかで、愉快な現象だと思ふ。ただし「もっこす」の定義はむづかしい

た住民気質に相当な影響を与えたのではなからうか。したがって、熊本市が海岸付近か阿蘇山ろくにでも立地していたら、もっこす気質もかなり変化しただけに違いないと思考している。

すでにクーラーやビル冷房の普及で、そうした環境条件は大きく変化し始めている。

テレビ、クーラーの時代に育つ肥後っ子の「もっこす気質」はどのように変化して行くものか、見守りたい。

(日本経済新聞熊本支局長)